

2026年6月15日

武蔵大学数理・データサイエンス・AI教育プログラム認定制度部会

1. 自己点検・評価の実施

2025年度の「武蔵データサイエンスベーシックス」について、2025年度春学期および秋学期に対象科目である「情報技術と人間社会」を開講した。武蔵大学リベラルアーツアンドサイエンス教育センターの下に設置された「武蔵大学数理・データサイエンス・AI教育プログラム認定制度部会」は、2025年度の同プログラムの実施状況について自己点検・評価を実施した。部会の構成は以下の通りである。

責 任 者 武蔵大学リベラルアーツアンドサイエンス教育センター長 踊 共二

委 員 武蔵大学リベラルアーツアンドサイエンス教育センター副センター長 内藤 永

委 員 武蔵大学社会学部教授、

数理・データサイエンス・AI教育プログラム認定制度 専門員 粉川 一郎

委 員 武蔵大学社会学部教授、武蔵学園データサイエンス研究所副所長、

数理・データサイエンス・AI教育プログラム認定制度 専門員 庄司 昌彦

外部委員 元グーグル米国本社副社長、元Google日本法人代表取締役社長 村上 憲郎

2. 自己点検・評価項目と評価方法

自己点検・評価の実施にあたっては、文部科学省「数理・データサイエンス・AI教育プログラム認定制度（リテラシーレベル）」の審査項目を点検・評価項目とした。プログラム対象科目に関する評価に際しては、教務課所轄の履修・成績データ、システム上の学修行動ログ、ウェブサイトのアクセス解析データ等を参考に評価した。

【学内からの視点】

- ① プログラムの履修・修得状況
- ② プログラムの学修成果
- ③ 学生アンケート等を通じた学生の内容の理解度
- ④ 学生アンケート等を通じた後輩他の学生への推奨度
- ⑤ 全学的な履修者数・履修率向上に向けた計画の達成・進捗状況

【学外からの視点】

- ①教育プログラム修了者の進路・活躍状況、企業等の評価
- ②産業界からの視点を含めた教育プログラム内容・手法等への意見

3. 評価結果の判定

評価結果に基づき、以下の三段階の評価段階で判定を行った。

3:優れたレベルの取り組みであり、十分に行われている。

2:標準的なレベルの取り組みであり、概ね行われている。

1:改善の必要がある。

4. 自己点検・評価結果

自己点検・評価の視点	自己点検・評価体制における意見・結果・改善に向けた取組等	評価
学内からの視点		
①プログラムの履修・修得状況	本プログラムの対象科目である「情報技術と人間社会」について、前年度の課題であった「1クラス開講に対し高い履修需要に伴う抽選漏れ」および「国際教養学部 of 学年暦に起因する履修登録のしづらさ」を解消するため、2025（令和7）年度は【春学期（庄司担当）】【秋学期（庄司担当）】【秋学期（松原担当）】の計3クラスへと大幅な開講数の拡充を適切に実施した。その結果、年間総履修者数は825名（経済学部312名、人文学部281名、社会学部200名、国際教養学部27名、非正規生5名）に達し、前年度（278名）から約3倍となる大幅な履修機会の拡大を達成した。特に国際教養学部 of 履修者は前年の3名から27名へと増加し、開講体制の見直しによる改善効果が顕著に現れた。年間単位修得者数は756名であり、履修者全体に対する単位修得率は91.6%（不合格率は8.4%）となった。合格者の成績分布は、S:62名（7.5%）、A:147名（17.8%）、B:507名（61.5%）、C:40名（4.8%）であった。前年度の課題であった「S評価が0名、半数以上（65.1%）がC評価、不合格率25.9%」という状況に対し、複数クラス化と教育環境の最適化を施した結果、成績分布の大幅な改善へと繋がった	3
②プログラムの学修成果	前年度の成績評価において数理・実践的なデータ処理に関する内容の理解を深める授業運営が課題とされたことを受け、2025年度は学修支援および授業構造において抜本的な改善策を実行した。具体的には、Google Classroomを標準基盤として活用し、毎回のオンデマンド授業後に個別理解度を確認する小テストを設けた。この小テストの作成プロセスには生成AIを組み込み、授業内容に準拠した良質な問題プールを構築した上で、教員が厳選して出題する体制を確立した。これによりオンデマンド受講における学生の知識の確実な定着をサポートした。さらに、教科書的な知識の伝達に留まらず、学生が直面する「卒業論文やレポート作成における、アンケート調査の設計・実施時の具体的なデータハンドリングの注意点」など、実践的かつ身近なコンテキストに接続した授業展開を行った。また、時事的な情報社会の動向をタイムリーに盛り込むことで数理への心理的障壁を下げる工夫を凝らした。これらの取り組みが、前述	3

	の不合格率の低下および上位成績層（S・A・B 評価）が全体の 86.8%を占めるという成果につながった。	
③ 学生アンケート等を通じた学生の内容の理解度	LMS（Google Classroom）を介した確認小テストにおける高い正答率の維持、ならびに最終成績において S・A・B 評価が大部分（86.8%）を占めた事実から、プログラムが提供する数理・AI リテラシーの内容について、受講生の多くが高い水準で授業内容を適切に理解・咀嚼できていることが確認された。 全学的な授業評価アンケート（2025 年度）の結果においても、「授業内容を理解できた」との肯定的回答は、3 クラスの回答者全体で 8 割を超えており、授業形態によらず内容の理解が十分に達成されていることが確認された。 一方で、授業評価アンケートの回答率は各クラスで 1 割前後にとどまっており、アンケート結果を履修者全体の傾向として一般化するには慎重である必要がある。今後は、LMS 等を通じた回答促進、授業内でのアンケート趣旨の周知、回答しやすい導線の整備等により、回答率の向上を図り、学生の理解度をより精度高く把握することが課題である。	2
④ 学生アンケート等を通じた後輩等他の学生への推奨度	2025 年度の授業評価アンケート結果において、「特に優れた授業として他の学生に薦めたい」との推奨度および総合満足度について、3 クラスの回答者全体の平均でいずれも 7 割前後の学生が肯定的に回答しており、概ね良好な水準を維持していることが確認された。また、「授業内容に興味を持てた」との肯定的回答も各クラスで過半数を大きく超えており、データサイエンスを身近な話題と結びつけた授業展開が学習意欲の維持・向上に寄与していることが示唆される。	2
⑤ 全学的な履修者数、履修率向上に向けた計画の達成・進捗状況	本プログラムを全学に波及させるため、大学公式ホームページを活用した広報および情報公開を継続した。2025 年度（2025 年 4 月～2026 年 3 月）のアクセス解析（Google Analytics）によると、プログラムの概要ページは年間 794 回の表示回数を記録した。特に秋学期の履修登録期にあたる 8 月（107 回）から 9 月（164 回）にかけてアクセスが急増しており、秋学期の複数クラス化に伴う学生の関心増幅がエビデンスとして示された。また、認定を伝えるニュースページは発表期の 9 月に 227 回のアクセスを記録した。部会において前年に立案した「開講授業数の見直しによる履修機会の最大化」という全学的な進捗計画は、3 クラス化によって十分に達成された。	3
学外からの視点		

①教育プログラム修了者の進路、活躍状況、企業等の評価	本プログラムは 2024 年度から本格開講したものであるため、現時点においては完成年度を通過した卒業生（修了者）を本格的に多数輩出する段階には至っておらず、進路状況および産業界からの直接的な評価を得るには時期尚早である。しかしながら、2025 年度においては、修了要件を満たした学生約 500 名に対して、3 月中旬に「武蔵データサイエンスベーシックス認定修了証」をオープンバッジ（ブロックチェーン技術を用いた世界標準規格のデジタル証明書）にて付与する学内体制を大学企画課・教務課等と連携して新規に構築した。今後は、このオープンバッジを就職活動等で学生に活用してもらうとともに、キャリア支援センターや卒業生アンケートと連携し、プログラムの長期的有効性の検証および追跡調査を行う基盤が整った。	2
②産業界からの視点を含めた教育プログラム内容・手法等への意見	AI やデータ活用が急速に社会の基盤となる中で、専門職を目指す学生に限らず、すべての学生がデータを読み、問い、適切に活用するための基礎を身につけることが重要になっています。その意味で、「武蔵データサイエンスベーシックス」は、リベラルアーツ教育の中にデータサイエンス・AI リテラシーを位置づける取組として、時宜を得たものです。 2025 年度には、「情報技術と人間社会」の開講を 3 クラスへ拡充し、年間 800 名を超える学生に学修機会を提供できたことを高く評価します。時間割上の制約があった国際教養学部 of 学生にも履修機会が広がったことは、全学的なリテラシー教育として重要な前進です。 また、学生自身のレポート作成や調査、日々接する情報社会の課題と結びつけて学ばせている点も有意義です。技術の操作方法を学ぶだけでなく、データを根拠として考え、AI や情報技術を社会の中で責任をもって扱う視点を育てることは、これからの大学教育に不可欠です。 今後は、オープンバッジも活用しながら、修了者の進路や社会での活用状況を把握し、産業界や社会の変化を柔軟に取り込んで、内容・手法を継続的に更新していくことを期待します。	3
数理・データサイエンス・AI を「学ぶ楽しさ」「学ぶことの意義」を理解させること	本授業科目は、「学ぶ楽しさ」「学ぶことの意義」を概念だけでなく、メディアリテラシーなど情報技術に関する基礎的な内容や身近な事例、時事的な話題をタイムリーに織り交ぜて展開している。2025 年度は、学生にとって極めて身近で実用性の高い「卒業論文やレポートにおいて、実際にアンケート調査を設計・実施する際の実践的なデータハンドリングのコツや注意点」を具体例として提示した。これにより、抽象的な数理の概	3

	念を自身の学生生活や将来のデータ活用に引き付けて考えることが可能となり、データサイエンスを学ぶことの意義をより深く、かつ自発的に理解させる授業展開を実現した。	
内容・水準を維持・向上しつつ、より「分かりやすい」授業とすること	授業自体の分かりやすさと、オンデマンド配信授業特有の受動的な学習傾向を打破するため、Google Classroom を介したフィードバック体制を確立した。前年度の課題であった「48%の学生が質問・問い合わせを行わなかった」という傾向に対し、毎回の確認小テストと並行して「自由記述コメント」の提出を必須化した。集まったテキストデータを教員が即時分析し、学生が躓きやすいポイントや潜在的なニーズをリアルタイムに把握した。これらを次回の授業冒頭や配信内での解説にタイムリーに反映（フィードバック）させることで、ラジオ感覚で親しみやすく、かつ個々の受講生を孤立させない、双方向で分かりやすい授業構成への継続的な見直しを実施した。	3

(別添) 参考資料

1. 履修者数(2025年度実績)

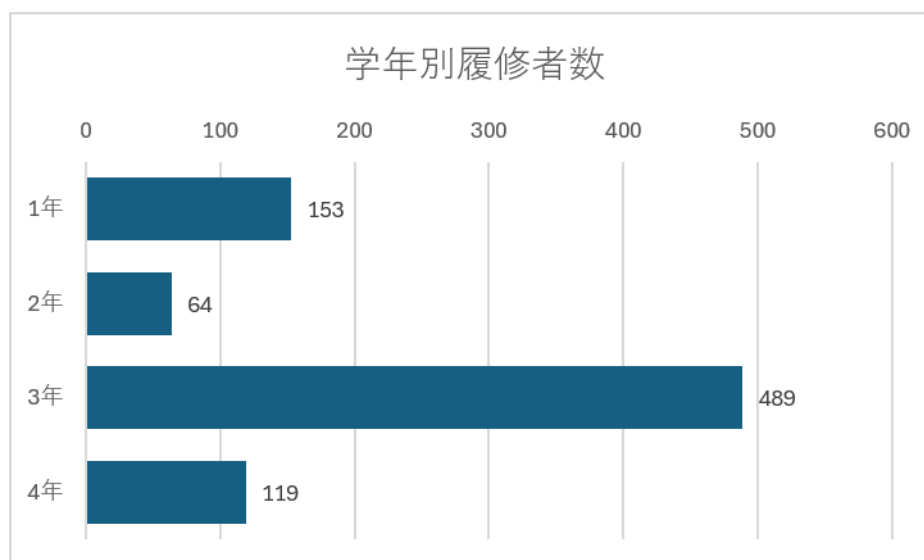
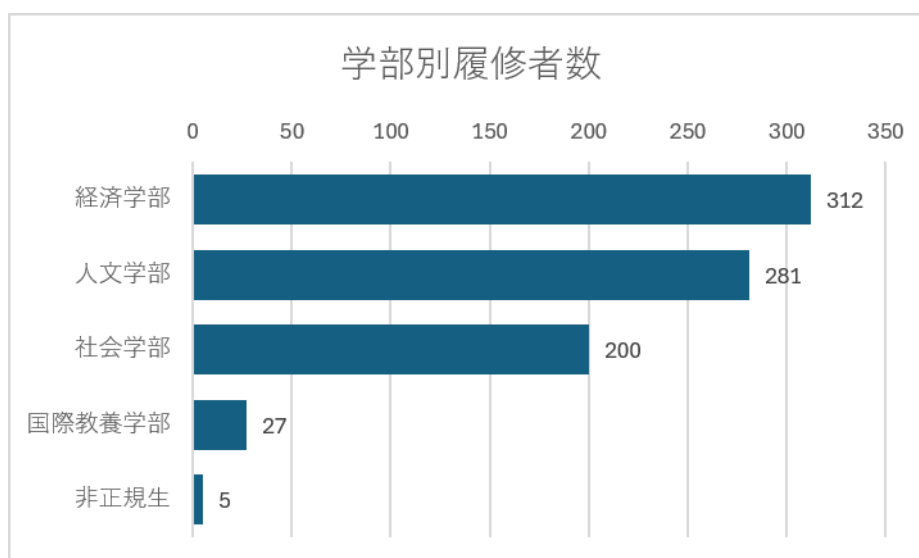
総履修希望者数(延べ): 4,040名(春学期: 2,883名、秋学期: 1,157名)

年間総履修者数: 825名(春学期[1]: 270名、秋学期[2]: 291名、秋学期[3]: 264名)

学部別内訳: 経済学部312名、人文学部281名、社会学部200名、

国際教養学部27名、非正規生5名

学年別内訳: 1年153名、2年64名、3年489名、4年119名



2. 成績評価(2025年度実績・3クラス合計)

単位修得者数(合格者): 756名(総履修者に対する単位修得率: 91.6%)

成績内訳: S評価: 62名(7.5%)、A評価: 147名(17.8%)、B評価: 507名(61.5%)

C評価: 40名(4.8%)、不合格(D/X/Q): 69名(8.4%)

